研究ノート

「社会論 '97」講義ノート

髙　橋　　準

1　はじめに――1997年度「社会論」のプランニング

たまたま1997年度前期の共通教育科目「社会論」(1) を担当することになった。何を話せばいいのだろうと考えたとき、まず最初に頭の中に浮かんだのが、その当時執筆中であった社会学の入門書の担当箇所の内容だった。

そういえば、自分自身大学に入学する以前から社会学の入門書・教科書をいくつも読んできたが、どれも「おもしろい」というにはほど遠いものが多かった。まさかその後、自分が社会学の入門書を一部分でも書くことになるとは思わなかったのだが、いざその役が回ってくるとやはり「おもしろい」と思えないものは作りたくないと思ってしまう。幸いなことに、出版社および編者の方針も「社会学テキストとしては従来にない形式、内容を採る」（執筆要項より抜粋）というものであり、自分の気持ちがこの方針と合致もしたので、思い切った内容と記述のスタイルを採ることができた(2)。

「社会論」の講義担当が内定したのがこの原稿の執筆途中だったので、「社会論の講義もこの内容でいこう」と決めるまでにはさほどの時間はかからなかった。「ジェンダー・身体・セクシュアリティ」。「社会論」にしては問題がパーソナルな部分に近いと言えるかも知れないが、ラディカル・フェミニズムも言っているように、“The personal is political”(3)、「個人的」なことがらだからといってそこに社会的な問題が潜んでいないということはない。むしろ、個人的なことと「されていること」の中にこそ、隠蔽され、「社会論」として論じられなければならないにもかかわらず放置されていることがらが存在してい

るかも知れない。結婚のこと、セックスのこと、ダイエットやエステ……。神妙な顔をしてノートを取っていたって、講義の最中にみんなの頭の中を占めているのは、実は「今度あの子をデートに誘うにはどうしたらいいか」とか「おなかすいたー。でも、ダイエットしてるし、今日のお昼はおそばだけで我慢しなくちゃ」などといったことだったりするのではないだろうか（話をしている教員だってそうだったりして）。これだったら、みんなの関心をとらえることができるはず（と勝手に考えただけだったのだが）。講義のテーマはこれで決まりだ。

それとほとんど同時に思い浮かんだのは、知人が非常勤で教えている一般教育科目の「感想文」のことだった。彼女は某私立大学で半期の科目「女性論」を担当しているのだが、毎回講義の終わりに出席した学生に感想を書いてもらって、それを次の講義の時にプリントにして配っていた。1996年の夏頃に会ったときにその感想のプリントを見せてもらったのだが、非常におもしろかった。ぜひ自分でもやってみようと思っていたので、この機会に実行することにした。

感想文は当然、コンピュータに入力し、電子テキスト化してから印刷することになる。そうすると、講義でプリントして配るだけではもったいない。電子テキストは再利用が容易であることが最大の特徴なのだから。だったら、html化してワールド・ワイド・ウェブ（いわゆるホームページ）に載せたり、コンピュータ通信の会議室に転載したりしてもいいかもしれない。それに対する読者からの反応もあるだろう。だとしたら、おもしろい「メディア・ミックス」も可能かも知れない。

こんなところで講義の大まかな内容とスタイルが決定された。たぶん、内容・スタイルともに（少なくとも福島大学の共通教育では）他に類例を見ない講義になるであろうことは予想された。「できるだけ風変わりな講義にしたい」という隠れた欲望がなかったとは言い難い。香山リカはテレビ出演について、「強制されたわけでもないのに、たとえば私なら『新人類と言われる年齢の女性精神科医』に合った発言をしなければいけない気分になってしまうのだ。」(4)

と語っているが、「教壇に立つ」ということもまたそれに似た効果があるようだ。わたしだったら、「福島大学の最若手の教員の一人」として、現代的なトピックと型破りなスタイルを何となく常時求められているような気がしないでもない。（もっとも、これはかなりの部分、妄想である。）

以下にまず講義の内容を示しておく（講義要項に掲載したものを修正して再録）。

I　講義の目的・趣旨

わたしたちが日常経験している、「女／男」の区別や、「からだ」をめぐる感覚、セックスに関するさまざまな意識。これらを「あたりまえ」のものとしてではなく、歴史と論理を持った「社会現象」としてあつかいます。

II　講義の概要

1　はじめに　～対象とアプローチ～

2　恋愛と結婚の社会学

(1)　あなたはどんな人が好き？　～「理想のパートナー」から考えるジェンダー～

(2)　愛情と結婚とセックスと　～微妙な関係・奇妙な関係～

3　身体の政治学

(1)　「絶対きれいになってやる！」～ダイエットとエステの文化政治学～

(2)　特殊講義「美人論」　～戦後日本における「美しさの民主主義」～

(3)　女と男の座り方講座　～身振りとしぐさのジェンダー～

4　セクシュアリティの諸相

(1)　「学生時代」を知っていますか？　～同性との「友情」、それとも「恋愛」？～

(2)　セクシュアル・ハラスメントの社会学

１回の講義は次のような構成になっている。

(1)　まず、事前に実施した調査（対象は受講生）の集計・分析を提示する。そして、それについての解説を加える。必要なら、類似の調査の結果も紹介して比較を行う。

(2)　残りの時間は、歴史的な文脈の中に問題を位置づけたり、あるいは何らかの理論に関連づけて、少し「アカデミック」な色彩を添えて「大学の講義」らしい体裁を整えつつ、その後の向学意欲をかきたてるスパイスとする。

(3)　最後にその時間の簡単な感想を書いてもらう。

(4)　感想、および事前実施の調査の集計・分析結果などは、ニフティサーブの生涯学習フォーラム・総合の17番会議室「女と男を考える・ジェンダーフォーラム」に掲載する（WWWにも同時進行で載せたかったが学期中は余裕がなかった(5)）。学生にはその旨あらかじめ伝えて、了承を得ておく。

(5)　ニフティサーブの会議室などで得られた反応は、セレクトした感想と合わせて次回の講義でプリントにして配布する。

ところで最近、橋本和孝（元福島大学行政社会学部教員）の「レジャーランド時代の社会学断章」(6)を読む機会があった。これは橋本がわたしと同じ科目（共通教育改革以前なので通年科目であり、「社会学」という名称になっているが）を担当したときの講義ノートの一部を研究ノートとして原稿化したものである。若干この論考についてもコメントしておきたい。

この研究ノートでは、まず、今日の「レジャーランド化した大学」における大学教育のあり方の一つとして、「奇をてら」って「学生に迎合する方向」があり得るのではないか、と述べられている（25頁）。この方向を採るために、橋本は、「現代の若者像」を取り上げたり、さくらももこの「ちびまる子」や柴門ふみのマンガ、歌謡曲・ポップス(7)、日本のプロ野球などを題材にして、学生の興味関心に近いテーマ（であり、かつおそらくは橋本自身もなじみがあ

るテーマ）を取り上げるという試みを行っている。

と、こう書くと、今回のわたしの「社会論」と同じようなアプローチなのではないかと思われてしまうかも知れない。確かに、おそらく橋本とわたしとが共通に考えていたことは、高校を卒業したばかりで、まだ大学という場で求められること（もちろん何が求められるかは学部・専攻などによって異なるだろうが、大まかにいって、与えられたものを覚えるのではなく、題材やテーマを自分で見つけてそれについて考える、ということはごく一般的に共通して求められていることではないだろうか）について深い自覚がない学生に、「いかに考えるか」ということを学んでもらおうと思ったら、「工夫」が一つも二つも必要だということなのではないだろうか。そこで採られた両者に共通する方法が、学問っていうものの本筋は、絵空事や机上の空論だけではなく（もっとも絵空事も机上の空論も多いが）、むしろ日々の生活と密着した題材について自分なりに「考える」ことなのだということを知ってもらいたい、という思いを下敷きにしたこのような方法だったわけだ。（違っていたらすいません、橋本先生。）

しかし同時に、両者には大きな相違点がある。それは、橋本がメディアのコンテンツを主な分析の題材にしているのに対して、わたしはむしろ、アンケートなどを通じて受講している学生一人一人の「好み」や「気持ち」を拾い上げ、それを第一の題材にしようとしたことだ。これはどちらが良い・悪いという問題ではないのだが、しかしたとえば橋本が「現代の若者像」で取り上げた若者の類型化(8)などは、わかりやすい反面、ここにあげられた類型に学生が自己を当てはめて、まるで雑誌の占い記事を読むかのように「自己との関係」を作り上げてしまうということが生じやすいという点では、危険な部分があるのではないだろうか。つまり、本来問いに付されるべき「現代の若者」としての学生の「自己」が、あらかじめ与えられたモデルへと学生自身によって同一化させられてしまい、問われることがないままに終わってしまう、ということが起こるのではないだろうか。それは本来の講義設計で意図したところではなかった

はずだ。

もちろん、わたしが今回の講義で採ったようなやり方ならこの点が完全に回避されるというわけではない（後述）。しかし、おそらく受講している学生たち自身が何を考えているのかを議論の切り口としたり分析の題材とすることによって、自分たちの考えが批評されることに対する反発もあるだろうが、それと同時に自分自身のあり方や考え方について考え直すきっかけもまた生まれるだろうと、講義設計の段階では考えていた。実際、学生の感想の中にも、「一般的なアンケートではなくて、ここにいる人たちのアンケートの集計をもとにしているので、興味もわくしおもしろい」という声があった。わたしの意図がどのぐらい成功したのかについては、いろんな評価基準があってむずかしいけれど、やや甘いかもしれないが、ある程度成功したのではないかと自己評価をしている。

もう一つの相違点は、わたしは決して今回講義で取り上げた内容が「学生への迎合」だとは思っていないという点だ。確かにこの内容だったら、高校を卒業したばかりの人たちでもとっつきやすいし関心も持ってくれるだろうという読みはあった。しかし、その読みはむしろ後から付け加えられたものだ。わたしとしてはむしろ、今回取り上げたような問題や、専門の講義「生活文化論」で取り上げてきたマンガ・アニメーション・テレビゲームなどのようなトピックは、自分自身や自分と同世代の問題関心の一部であると考えている。これらは、古典的な社会学が発展した時代には存在しなかったものではあるが、だからといって重要な問題でないというわけではない。このあたりは、橋本よりもわたしの方が、学生たちに世代的にかなり近いということが相違となって表われているのかも知れない。

なお、試験問題（レポート課題）は、第１回の講義の際に発表した。これもまた、あまり類例がないことかも知れない。またもやいささか「奇をてらった」やり方かも知れないが、一応こちらにも言い分はある。

つまり、学生が何のために講義に来ているかというと、もちろん理由はいろいろあるのだが、一番大きい理由は「学期末に試験を受けて単位をもらう」ためだ。「学問の真理を究める」とか「講義そのものがおもしろい」「友だちと待ち合わせ」などというその他の理由は、数としては少数であるか、この理由の上にさらに重ねられるものでしかない。（念のために付け加えておくが、わたしは決してこうしたことを非難しているわけではまったくない。また、数が少ないから無視していいとも思わない。）

だったら、初めから試験問題を提示して、「この問いに答えるには、講義の中で何をどう聴けばいいか」を考えて実践してもらうことだって、一つのやり方だろう。

もっとも、学生が共同で回答を作成すると「困る」ような出題では、これは出題者側の工夫が足りない。今回は次のような課題を出した。

> 講義で取り上げた一つないしは複数のテーマについて、TV ドラマ・マンガ・小説などのフィクション、新聞などに発表される世論調査の結果報告、自分で行った量的・質的調査（捏造不可）といった具体的な素材を用いて、ケーススタディを行ってください。枚数自由。ただし、用いたデータについては出所を明らかにすること。不明確なものはレポートとして認めない場合がある。
>
> 評価基準は以下の通り。
>
> 1）素材をどのくらい深く読み込んでいるか。
>
> 2）適切な手法・アプローチ・理論を用いているか。
>
> 3）結論の導出に論理の飛躍はないか。

ここで表明されている立場はすなわち、「講義とはあくまでも「例示」に過ぎないのであって、その内容をただ覚えても意味がない。講義で学んだ視角・

方法・実例などを、ささやかにであっても自分なりに応用してみることに意義があるのだ」という立場である。

これは、江原ほかによる『ジェンダーの社会学』（新曜社、1989年）で「Do Sociology!」と表紙に書かれていることに通ずる。社会学のテキストがおもしろくないのは、無味乾燥な概念の羅列に終わっていることが往々にしてあるからなのだ。そんなテキストを丸暗記することが楽しいわけがない。概念は結局「使ってなんぼ」のものだ。講義でも、受講した学生ひとりひとりに、学んだことを使ってもらう、つまり「社会学して」もらうことを一番のねらいにすることだってできるはずである（ただし、これがしばしば過大な要求であることは理解している）。

とまあ、こんなふうに考えたわけだ。このねらいがどのくらい活かされるのかは、提出されたレポートを見てみるまではわからないのだが。

2　講義概要

それでは、実際の講義の内容について概略を紹介する。できればすべてを紹介したいのだが、主に紙幅の関係で、「ジェンダー」「身体」「セクシュアリティ」各セクションごとに１つのトピックにしぼることにしたい。

(1)　あなたはどんな人が好き？　～「理想のパートナー」から考えるジェンダー～

「カレシにするなら、そうねえ……」とか、「ああいう娘、つきあうにはいいけど、結婚すんのはちょっと」とか、よく仲のいい友達同士で話したりすることがある。恋愛は男女を問わず、若者の最大の関心事の一つだ。結婚になると、まだ考えたことがないという人も十代だと多いけれど、いずれは自分で経験することとかなりの人は思っているだろう。早く結婚したいと思っている「結婚願望」が強い人も、女性を中心に存在する。

「社会論 '97」講義ノート（高橋　準）

普通、社会調査として「理想のパートナー」を問う場合には、あらかじめ選択肢（たとえば、「高収入」とか）を用意しておいて答えてもらうようなやり方を採る。しかしこの講義では、まず徹底的に素朴に、「結婚するならどんな人がいい？」「恋人にするならどんな人がいい？」と問いかけてみることからスタートした。こちらから判断の枠組みを提示して選んでもらうのではなく、あくまでふだん何を考えているかを自分のことばで表現してもらうことを大事にしたということだ。したがって質問は、上記の二つの問いに自由記述で答えてもらうという形式になった。（教室を半分に分けて、片一方には結婚相手について、もう片一方には恋人について答えてもらった。）

男女とも、次のようなプロセスで回答のデータを処理している。

1）回答の内容を、身体的なことがら、人格的・情緒的・人間関係的なことがら、社会的地位に関することがら、その他、の４つに大きく分ける。

2）身体的なことがらは、回答内容を通読した上で、全体を次のようにカテゴリーに分ける。

a）身長、b）スタイル・体重、c）顔立ち（目鼻立ち、顔かたち）、d）髪、e）その他（※ただし、あとから「かわいい」というカテゴリーを追加）

3）人格的・情緒的・人間関係的なことがらについては、大きなカテゴリーに分類するのではなく、使用されている単語に注目して、いったんできるだけ細かく分類していく。最後にやや大きくまとめる。

4）社会的地位としては、職業・学歴・収入及び財産などの回答をここへ分類する。（もっとも、回答は非常に少なかった。）

5）その他項目のところでは、年齢、持ち物（車含む）などを予想。

回答の結果を簡単にまとめておく。

A．恋人にしたい人（回答者146人。うち女性84人、男性62人）

あえて「恋人にしたい異性」とは問うていないのだが、明示的に「恋人にし

たい同性」を答えてくれた人はいなかった。ここではとりあえず「ヘテロセクシュアル」の枠の中で考えていくことにする。

女性の回答から：

1）実はみんなすごく気にしている男の子の「身長」「スタイル・体型」「顔立ち」。ただし、「身長」では、「背が低い人」という答えはない。ほとんどの人が、「自分より高い人」を答えている。ほかの項目については、好みの問題も多々あり。なぜか多かったのは「ロン毛不可」(10名)。

2）性格的な面では、「明るい」「やさしい」「(話していて）楽しい」「気が合う」は必須アイテムか？　その他、「沈黙していても気にしない」とか「自分を理解してくれる」という希望もけっこう多い。

　女性に特徴的だったのは、「尊敬できる」「守ってくれる」「リードしてくれる」「頼れる」「自分の欠点などを指摘してくれる」。「知的・知識が豊富」というのも多い。

　「きれい好き」「清潔好き」「あんまり汚いのはイヤ」という答えもいくつか。

3）「お金を持ってる人」という答えはいくつかあったけどそれほど目立たなかった。

4）「趣味が一致」や「ある趣味を持っていること」はわりと回答があった。男性にはなかった回答は、「車（あるいは、かっこいい車）を持っていること」。

男性の回答から：

1）身体的特徴としてあがったものでは、顔立ち（目、鼻、口、顔かたち）などへの注文が、やはり多い。全体の半数は、何らかの注文を付けている。体型・スタイルについても同様。ただし、個人によって、好みの違いはあるようだ。

注目したいのは身長。注文のほとんどは「自分より背が低い人」なのだが、若干名から「160cm以上」という「下限を切る」注文があった。

髪の毛に注文を付けている人は圧倒多数が「ロング」または「セミロング」。

2）性格面では、「明るい」「話が合う」「話を聞いてくれる」「やさしい」のポイントが高い（これは男女とも）。

ちょっと注目したいのは、「自分を理解してくれる」「自分の考えを持っている」の双方をあげた人が、身体的な条件に言及していなかったこと。

その他のキーワードをあげる。「しっかりしている」「リードしてくれる」「甘えさせてくれる」「少女っぽい」「心がきれい」「個性的」「積極的・行動的」「自分を好きになってくれる」「しとやか」。

性格ではないが、「趣味が合う」あるいは「特定の趣味を持っている」ということをあげている人もかなり多い。

3）「家柄」とかをあげる人はさすがにいない。ただし、「財産」をあげた人が１名。

4）そのほか、「ファッション」をあげた人が若干。「センスがいいファッション」「シンプル」などから、「化粧が濃いのはいや」とか「着飾らない人」まで。

あとは、年齢で「年上」がいいという人が４人ほど。「年下」を条件にした人は意外に少ない。

「女らしい」という抽象的な答えは少なかったが、「家庭的」「料理ができる」「お弁当を作ってくれる」などという答えがいくつかあった。逆に、「男っぽい性格」ということをあげている人もいた。

集計結果の主なところをわかりやすくクロス集計表とリストにまとめておこう。

クロス表1：男女別・身体的条件への普及（カッコ内は実数）

	身　長	スタイル	顔立ち	かわいい(*)	髪	その他	全　体
男　性	32.3% (20)	33.9 (21)	40.3 (25)	19.4 (12)	24.2 (14)	9.7 (6)	64.5 (40)
女　性	42.9% (36)	35.7 (30)	36.9 (31)	2.4 (2)	13.1 (11)	13.1 (11)	71.4 (60)
全　体	38.4% (56)	34.9 (51)	38.4 (56)	9.6 (14)	17.8 (26)	11.6 (17)	68.5 (100)

(*)「かわいい」には性格的なものと身体的特徴の双方が含まれている可能性がある。ただし、男性の回答で「美人というよりはかわいい」と表記してある場合には身体的特徴に含めた。

クロス表2：男女別の人格的・情緒的条件への普及（合計の上位8位まで）

	やさしい	話ができる・話が合う	明るい	知的・知識がある	自分（の考え）を持っている	自分を理解してくれる	楽しい・おもしろい	行動的・積極的
男　性	17.7% (11)	22.3 (14)	29.0 (18)	6.5 (4)	14.5 (9)	4.8 (3)	4.8 (3)	11.3 (7)
女　性	35.7% (30)	20.2 (17)	9.5 (8)	21.4 (18)	13.1 (11)	15.5 (13)	14.3 (12)	6.0 (5)
合　計	28.1% (41)	21.2 (31)	17.8 (26)	15.1 (22)	13.7 (20)	11.0 (16)	10.3 (15)	8.2 (12)

(*) 合計：男性87.1%（54）、女性96.4%（81）、全体92.5%（135）

性格的条件・女性に特有のキーワード（複数の回答があったもの）

- 包容力がある、心が広い
- リードしてくれる
- 頼れる
- 尊敬できる
- 守ってくれる
- 誠実

性格的条件・男性に特有のキーワード（複数の回答があったもの）

- 心がきれい

B．結婚相手にしたい人（回答者129人。うち女性56人、男性73人）

女性の回答から：

1）まず、身体的条件をあげた人がわずか14%しかいなかったことは、恋人篇と比較して特筆すべきことだろう。

2）「やさしい」「自分を理解してくれる」は男女を問わずポイント高し。恋人篇との比較でもう一ついえるのは、「守ってくれる」「頼れる」「尊敬できる」などの数の総計が比較的多いこと。

3）しかし、何と言っても、経済的条件をあげる人が多かったことが何より注目に値すること。ただし、表現は様々。「ある程度の収入」「生活に困らない」「貧乏じゃない」「高望みはしないけど」、etc.「家庭を大事にしてくれる人」もポイントが高いが、書き方にやや特徴がある。ほとんど必ず、「仕事よりも」という言葉が先に来ている。当たり前かもしれないが、「まず働いていて収入があること」が必須？

4）そのほか、「家事ができる人」「料理ができる人（得意な人）」「子どもの面倒を見てくれる人」なども人気があることを覚えておいた方がいいかも。また、「共働きを認めてくれる人」が６人。これは一つの学部に集中していた。

男性の回答から：

1）身体的条件をあげる人は、恋人篇よりも少ないものの、40%を越す。

2）性格その他では「やさしい」「明るい」「自分を理解」がポイント高いが、なんといっても多かったのが、「家事（料理）ができる・好き」「家庭的」「家事専業」。この３つのどれかを答えている人は、男性全体の34.7%（25人）。

やはりここでも、データをクロス集計表とリストにまとめておこう。

男女別・身体的条件への普及（カッコ内は実数）

	身　長	スタイル	顔立ち	かわいい	髪	その他	全　体
男　性	11.1% (8)	18.1 (13)	18.1 (13)	13.9 (10)	5.6 (4)	5.6 (4)	41.7 (30)
女　性	7.1% (4)	0.0 (0)	8.9 (5)	1.8 (1)	0.0 (0)	3.6 (2)	14.3 (8)
全　体	9.4% (12)	10.2 (13)	14.1 (18)	8.6 (11)	3.1 (4)	4.7 (6)	29.7 (38)

男女別・性格その他の条件への言及（５％以上、カッコ内は実数）

男性：

家事をする・得意	27.8% (20)
優しい・思いやりがある	16.7% (12)
明るい	13.9% (10)
自分を理解してくれる	9.7% (7)
子ども好き	9.7% (7)
自分と同じ価値観	8.3% (6)
知的・頭がいい	8.3% (6)
自分を好き	8.3% (6)
家庭的	6.9% (5)
収入・財産	6.9% (5)
自分の考えがある	5.6% (4)
安心できる	5.6% (4)
浪費をしない	5.6% (4)
※家事専業	4.2% (3)

女性：

収入・財産	39.3%	(22)
優しい・思いやりがある	25.0%	(14)
家庭・家族を大事に	21.4%	(12)
家事をする・得意	21.4%	(12)
自分を好き	16.1%	(9)
子ども好き	12.5%	(7)
自分を理解してくれる	10.7%	(6)
仕事をするのを認めてくれる	10.7%	(6)
育児に協力してくれる	10.7%	(6)
自分と同じ価値観	8.9%	(5)
心が広い・包容力がある	8.9%	(5)
頼れる	8.9%	(5)
知的・頭がいい	7.1%	(4)
明るい	7.1%	(4)
浪費をしない	7.1%	(4)
しっかりしている	5.4%	(3)
夢・野心がある	5.4%	(3)
守ってくれる	5.4%	(3)
尊敬できる	5.4%	(3)
安心できる	5.4%	(3)

Ａ、Ｂを合わせて考察を加えておく。

まず、「恋人にしたい人」については、男女ともに外見に非常に大きなウェイトがおかれていることが分かる。よく、「男はカオじゃない」と昔は言われたそうだが、現代はそんなことはないということだろうか。

興味深いのは、男性の側からは、「行動的」「積極的」「明るい」「自分の考えを持っている」という回答がかなりあり、逆に女性の側からは、「やさしい」（これは男性ではそう多くはない）「自分を理解してくれる」が多いこと。「積極的な女性」「優しくて理解ある男性」が求められているのだろうか？　そういえば、戦後ずっと「若い男がダメになった」とか、「女が強くなった」と言われ続けてきている。「フェミ男くん」（女性的な外観の男性のこと。いわゆる“sissy”なタイプと類似していると考えてよいのだろうか）という言葉も数年前に流行した。それが男女共に、現代大学生にとっての理想の異性像になっているのか？　しかし、この結果は逆にも読める。現実にはそういうタイプが少ないから、要求として出てくるという解釈だ。このあたりは慎重になる必要がある。

同時に、女性の側から、「知識がある人」や、「頼れる」「尊敬できる」「リードしてくれる」といった、「自分より優位にある」男性を求める声もある程度の割合で出ていることも忘れてはならないだろう。結婚の場合だと、自分より上位の社会階層の出身者あるいは社会的地位が高い者と結婚するという、女性の側からの「ハイパーガミー」が戦後の結婚のパターンとして認められるわけだろうが、これはその恋愛バージョンであるのだろうか。もちろんここで、「年齢」や「身長」なども合わせて考えることも可能である。しばしば、ある一組の男女が「釣り合う」という感覚は、「男＞女」である状態なのだ。

このことは、一組の異性愛カップルにおける男女の権力関係の不均衡を構造化し、女性の側には男性に服属する心理的・社会的圧力を与えると同時に、男性の側には、常に女性に対して優位でなければならないという心理的圧力と、男性同士の間での競争を生じさせる。牽強付会をおそれずに続けるならば、以上によって再生産されるものは、男性優位の家父長制秩序そのものである。

次に、こうした「恋人にしたい人」の像をBの「結婚したい人」の像と比べてみたとき、何といっても一番大きな違いとしてあるのは、後者の場合女性で身体的条件をあげた人が14%しかいなかったことであろう。男性が、結婚相手にもけっこう身体的条件にうるさい注文をつけているのと対照的である。そういえば、「恋愛の相手と結婚相手は別のタイプ」などということばもよく聴かれたけれど、男性だけでなく女性もそう思っているということなのかもしれない。

ところで、ここで身体的条件に代わって女性の多数が出してきている「経済的安定」(老後を見通した人もいた)という条件は、実はずっと以前からの傾向である。

たとえば、大正期の婦人雑誌(比較的学歴が高く、出身家庭の収入・社会的地位が中程度以上の人が読んでいた)を見ていると「能力」と稼得収入による「経済的安定」がまずあがってくる。男に必要なのは、まず仕事を持って金を稼いでくれることなのだろうか。「近代家族」における「男は外、女は内」という性別役割分業構造をそのまま再生産するような要求である(9)。

ただし今日的特徴として、「家事をやってくれる人」をあげる女性が多いということにも合わせて注目したい。これは、女性の側からの性別役割分業への批判なのだろうか。そういう面もあるだろう。実際、「生涯働き続けたいので、結婚相手には家事を手伝ってほしい」という記述もあった。そうでない回答に対しては、「退職－再就職」型のM字型雇用曲線に沿った意識であると考えることもできるかもしれない。そしてもちろんこの背景には、日本の既婚男性の平均家事時間が一日10分台であるという事実もあるだろう。

他方、男性の側では、まだまだ旧来型の性別役割分業への期待は強く残っているのではないだろうか。「家事が得意な人」は第一位にあがっているし、「家事専業」を求める声すら存在する。これなどは自分一人の収入でまかなえるという「自信」に満ちあふれている回答と言えるかもしれない。これは決してほめているのではなく、単に「家父長制的な意識を反映している」という意味で言っているにすぎないが。

よく、性別役割分業意識や性差別意識に関して、「変わる女・変わらない男」と言われる。図らずも今回は、この言葉をある程度確認する結果となった。何気なく日常の中で、わたしたちは（異性愛者であれば）異性に対する「好み」を作り上げている。それはあくまでも個人的な「好み」であるが、しかし明らかに社会的な規範や価値観の影響を受けている。非常に個人的なことも、社会的な力の影響を完全に免れるわけにはいかないのだ。

(2)　特殊講義「美人論」　～「美しさの民主主義」の検討～

本来この回には、「オトコにつける形容詞　～男性学特論・「美男」論の試み～」と題して話をするはずだった。当初はその予定で、第一回目の講義時間にはアンケートまで実施したのだが、諸般の事情で残念ながら予定を変更せざるを得なかった(10)。

かわりに「美人論」（以下、カッコ書きした場合の「美人」は、「美しい」とされる女性のことを意味するものとする）として、井上章一や小玉美意子らの議論(11)を紹介しながら、その一つ前の講義で取り上げた「ダイエット」や「エステ」の流行の話とからめた話をした。

前提として、現代女性の間で「ダイエット」や「エステ」に対する関心が非常に高まっているということがある。講義中に実施した調査では、実に回答した女子学生の約７割が「ダイエット」（本来ダイエットと言った場合は食餌による痩身を意味するが、ここでは痩身法一般のことを指す慣用的用法に従って使っている）を経験している。１年生が多い講義であるので、女性の場合、かなりの割合で高校時代あるいは中学時代からすでに「ダイエット」経験があるということだろう。（次ページ以降に調査票(12)と集計結果の一部。）

浅野千恵が言うように(13)、ある意味で「ダイエット」を「する」ということは、自分が女であるというアイデンティティの確認の行為にすらなっていると言えるかも知れない。逆に、「ダイエット」をしないなんて考えるのは、「女じゃないっすね」（今回調査の自由記述の欄の回答より）ということになる。

「ダイエット」は、成功することにも大いに意義がある。確かに、成功して痩せれば、「きれいになったね」とほめられる。努力に対して社会的に報酬が与えられ、自分の満足感も得られるというわけだ。

Ｑ１　あなたは今までに「ダイエット」をしたことがありますか。
　１　はい　　２　いいえ
（上で「１」とお答えになった方は以下のＳＱ１～３にもご回答ください。）
　ＳＱ１　どんな内容のものですか。具体的にお書きください。
　ＳＱ２　その「ダイエット」についての情報は主にどのように入手しましたか。１つだけ選んでください。
　　１　雑誌・書籍から　　２　ＴＶ・ラジオから
　　３　友人・知人から　　４　その他　（　　）
　ＳＱ３　「ダイエット」の結果についてどのような気持ちになりましたか。
Ｑ２　「ダイエット」以外に自分のからだに手を加えたことがありますか。以下の中から当てはまるものをいくつでも選んでください。
　（ＳＱにもご回答ください。）
　１　エステティック　　ＳＱ　具体的内容は？（　　）
　２　美容整形　　ＳＱ　部位は？　（　　）
　３　筋力トレーニング・ボディビル
　　ＳＱ　スポーツ・トレーニングの一環としてですか。
　　１　はい　　２　いいえ
　４　その他
Ｑ３　次の４種類の雑誌の名前を聞いてどんな印象を持ちますか。自由にお書きください。
　ViVi　　Ray　　JJ　　CanCam
（1997年５月７日実施）

○集計結果（部分）

※回答者内訳

教育学部80人、行政社会学部67人、経済学部18人　　女性99人、男性66人

Ｑ１　「ダイエット」の実行経験

１　ある　……　84人　　２　ない　……　81人

ＳＱ１　「ダイエット」の種類

食事制限（量を減らす、間食を抜く、お茶だけ、その他）……　61人
運動（ジョギング、特別な体操、その他）　……　46人
薬・食品（リンゴダイエット、オオバコ、その他）　……　21人
器具（スパイラルテープ、ラップ、ほか）　……　10人
その他　……　11人
不　明　……　1人

ＳＱ２　「ダイエット」情報入手元

１　書籍・雑誌から　……　45人
２　ＴＶ・ラジオから　……　9人
３　友人・知人から　……　10人
４　その他　……　16人（「自分で考えた」がほとんど）
不　明　……　4人

Ｑ２　その他の身体の改変

１　エステ　……　2人
２　美容整形　……　1人
３　筋トレ・ボディビル　……　56人
４　その他　……　20人（ピアス、髪の脱色・染色、など）

○性別とのクロス表

1　性別とダイエット実行

性別＼経験	あ　り	な　し	計
女	70	29	99
男	14	52	66
計	84	81	165

2　性別と情報入手元

性　別＼入手元	1	2	3	4	不明	計
女	43	6	9	9	3	70
男	2	3	1	7	1	14
計	45	9	10	16	4	84

3　性別と筋トレ

性別＼目的	スポーツ	それ以外	両　　方	計
女	11	3	2	16
男	36	2	0	38
計	47	5	2	54

だが、「ダイエット」がアイデンティティの確認であるということは、それ以上のことを意味する。たとえ失敗したところで、自分は「ダイエット」をしてる、体重に気をつかっている、ということが、自分の女性としてのアイデンティティの確認になるというわけである。

もちろんこうした背景に存在する、「きれいになる」ことでしか女性としての「成功」を勝ち取り得ないという社会規範を無視することはできない。これが一番問題なのかもしれない。女性の達成感は「きれいになる」ことによって

しか手に入れられないのだ。(実はもう一つ、「母になる」という方法もあるのだが。)

女性にとっては、学校やビジネスでの達成感がそのまま自分の達成感としては認識されにくい。もちろんまったく得られないわけではなくて、むしろ昔よりはずっと、女性が学校やビジネスでの達成感を得るチャンスは増えている。また、世間もあからさまに「女は大学に行かなくてもいいんだ」とはなかなか言わない（もっとも、なくなってしまったわけではない)。

しかし、むしろそうであればあるほど、「女である」ことが個々の女性にとってどうも重荷になっているようなところがある。勉強ができても、仕事ができても、あるいはできればできるほど、「きれいになりたい」という気持ちはわき上がってくるものなのかもしれない。浅野は著書の中で、「一流」とされた就職をした女性が、その「成功」によってかえって拒食症へと追いつめられていった例をあげている。これなども、男性ならば公的な領域における「成功」が彼の男性としての評価にそのままつながっていくところが、女性の場合は、女性としての評価のためには別なものが必要になることから来るプレッシャーなのかもしれない。

しかし、昔からずっとスリムな女性がもてはやされてきたのだろうか？　かつてはこんなにまでみんな体重を気にしてはいなかったのではないだろうか。

香山リカは、「十年前に活躍していたアイドル歌手はみな、コロンコロンに太っているのに驚かされます。今日のほとんどの高校生よりスタイルが悪い。昔はそれを『カワイイ、ああなりたい』と憧れて見ていたわけですから、標準的なボディ・イメージはこの十年で大幅に変わり、ワンレベル、サイズが小さくなったようです。」と書いている(14)。おそらく彼女の言うとおりだろう。

そこで先に挙げたような議論を主に参照しながら、近代以降の「美人」像をざっとながめておこう。

まず、「美人」ということばについて。

「人」を表すことばは数多くあるけれど、たとえば、英語の“man”などは、「人」でもあり「男」でもある。ドイツ語でもそうだし、フランス語でもそうだ。日本語でも、「作家」ということばはあるけれど、女性であることを示すために、わざわざ「女流作家」なんて言ってみたりもする。これを「有徴化」という。

でも、「美人」ということばだけはちょっと特別なようだ。このことばには「人」という言葉が入っているけれど、別にそのままで（いや、そのままでなくても）「男」を意味はしない。

「美人」ということば、もともとは中国で漢の時代に宮女の官名として使われた言葉だったそうだ。日本では、江戸期に男性にも使った例があるようだが（井原西鶴の『世間胸算用』）、近代以降はほとんどと言っていいほど女性に対して使われている。

さてその、「美人」というときの「美しさ」の内容は、文化によって、時代によって異なる。平安時代の貴族が考えた美女のイメージと、現代の「美人」のイメージは、たぶん大きく異なっているだろう（『源氏物語絵巻』に登場する女性を思い浮かべてほしい）。

井上章一の『美人論』によれば、明治期には「美人」はさんざんな目にあっていたようだ。「美人バッシング」とでも呼べるようなものが存在したらしい。たとえば、高等女学校の道徳（修身科と言ったけれど）の教科書には、「美人は誘惑が多く堕落しやすい」と書いてあったりした。教育の場でこういうことが公然と語られていたのである。

こういった言説を整理して、明治期に語られた「美人が悪い３つの理由」を押えておく。

(1)　「美人」には徳がない

先に挙げた「美人は誘惑が多いから堕落しやすい」というたぐいの言説がこれだ。もっとも、堕落するのは誘惑する男のせいとも言える。

井上が挙げている例ではもう一つ、学習院の女子中等部で、うっかり「美人

コンテスト」で一位になってしまった女子生徒が放校になってしまった（1908年）ということもある。「美人である」と世間から認められることが道徳的に非難された一つの例として考えることができるということであろう。

(2)　「美人」は不健康だ

これはおそらく、当時、柳腰で青白い肌という女性が多く「美人」とされていたということによるだろう。もっとも、単に医学的に不健康というだけではない。例えば、谷崎潤一郎は、1930年に「京女の歯は汚い」と書いている（これは明治期じゃないけど）。今だったら、歯磨きのＣＭで「芸能人は歯が命」というキャッチコピーがあるように、「白くきれいな歯」は美人の条件として必要不可欠な項目とも言える。しかし、この頃までは、歯がきれいかどうかということは、美人の条件としては「思いもよらなかった」らしい。谷崎の上の記述は、価値観の移り変わりを示唆していると言えるだろう。

そういえば、第二次世界大戦中は、兵力増強のために「産めよ殖やせよ」が奨励された。その頃には、「翼賛美人」というものがあったらしい。腰幅の広い安産型の女性のことだ。丈夫な子どもをたくさん産める、ということだろう。この背景には、腰の細い女性が「美しい」とされていたこと、および出産時・出産後の女性の死亡率の高さがあったと推察される。

(3)　「美人」は才がない（いらない）

当時の女学校には、「卒業面」という言い方があったようだ。つまり、卒業までちゃんと在学するような「顔」の女性、ということらしい。当時いいとこのお嬢さんが通っている女学校には、近所の名士などが授業参観に来て、自分の息子の嫁にする女性の「品評会」を行っていたらしい。そうやって、「美しい」とみこまれた生徒は卒業まで在籍せずに結婚してしまう。残るのは、選ばれなかった生徒。だから、美人は「才を欠いている」。もっとも、学校で得られる知識よりも、この頃大事だったのは家庭で行われる「家族教育」(15) だったようであるが。

そういえば、与謝野鉄幹は「妻をめとらば才たけて、みめうるわしく、情け

ある……」とうたったが、これは、「才」と「情け」（＝徳）と「みめ」（＝美しさ）が同居している女性というものは探すのは難しいと考えられていたからこその発言とも考えられる。

大正期にはこうした「美」の基準に転換が始まるのが観察される。井上章一や沢山美果子(16)があげている例を整理してみよう。

(1) .「心がきれい」なのが美人

(2) 「健康」なのが美人

(3) 「知性」の美しさ

これらはみな戦後へと引き継がれる。

おそらく背景には、優生学の普及、新中間層の台頭、などがあるだろう。「よい子」を産み、養育し、適切な「家庭教育」を行うのに必要なのは、単純に顔がきれいでスリムでというような「美しさ」ではない。高等女学校卒が結婚相手の必要要件と考えられるほど、「学歴」も必要とされるような時代になったのだ。

戦後はどうなっただろうか。

ウーマンリブ運動の中では、ミス・コンテスト反対の際に「女はみんな美しい！」という主張がなされた。おそらく1970年代以降の社会史は、リブが主張したことが別の形で（しばしばリブが望まなかったような形で）実現されていく過程であったといえる。性の解放や女性が働くことなどがそうではないだろうか。

「女はみんな美しい！」という主張もまた、同じ様な経過をたどる。井上章一はそれを「容貌の民主主義」と呼ぶ。戦後民主主義の流れの中で、「美しい」ということもまた平等になってきたということだ。

もちろん、みんな平等ということなら、みんなが一様に不美人でもいいのだし、みんなが一様に普通でもいいはず。なぜ、「みんな美人」ということになってきたのだろうか？　それは、美しさが産業化されたからではないか、と彼は言う。

ここでは井上の議論を踏まえて、もう少し幅を広げておこう。それを仮に「美しさの民主主義」と呼んでおくことにする。

その構成要素は、次の２つである。

(1)　価値の多様化

「美人」とされる女性のタイプが非常に多くなった。「民主主義」は価値観の多様性を原則とするが、その原則にものっとっている。

(2)　「美しさ」の拡散

現代では、単にカオがきれいなのが「美人」、というわけではなくなった。落合恵美子は、女性雑誌の表紙に登場する女性像を分析して、60年代まではバストアップの写真が多かったのに対して、70年代以降、全身像が多く取り上げられることに注目している(17)。これは明らかに、「美人」のイメージが顔中心から全身へと広がっていったことを意味するものである。その上にさらに、「身体のパーツ化」(18) がすすみ、髪、肌、化粧、ファッション、スタイル、さまざまな部分に「美しさ」がやどるとされるようになった。これによって、たとえば、流行のヘアスタイルにして、ダメージヘア専用のシャンプーとコンディショナーを使って髪のツヤを出し、アクセントにちょっとメッシュを入れてみる、というふうにして「美しさ」を手に入れることが、誰にでもできるようになった。「甘やかしたボディ」も、ダイエットの「努力」や矯正下着で、「あなたらしく、美しく」なることが可能だ。

そう、努力すればみんながきれいに「なれる」のだ。それが「美しさの民主主義」ということの意味である。だからリブが言っていた「女はみんな美しい！」(何もしなくても、そのままの姿で「美しい」ということを意味する) というのとは、ちょっと、いやだいぶ違う。

ところで、みんながきれいに「なれる」ということは、どういうことだろう。それは実は、「きれいじゃない」のは「本人の努力不足」にされるということでもあるのだ。「できる」のに「やらない」ことは、「手抜き」だとされてしまう。あるいは、「みんながきれいになれるんだから、あたしもきれいにならな

きゃいけない」というひそかな脅迫でもあるかもしれない。

これまでは、カオが「美しく」なければ「あきらめた」。しかし、今は、あきらめるのは個人の努力放棄であるとされてしまう。「美しさの民主主義」は、全ての女性に「美しさ」へのアクセス権を与える。それはある意味でとてもいいことだ。しかし同時に、「美しさの民主主義」は、今述べたように女性たちに競争を強いる装置でもあると言える(19)。みんなが「美しく」なれる時代というのは、必ずしも女性にとって楽しい時代であるというわけではないのかも知れない。

(3) セクシュアル・ハラスメントの社会学

「セクハラ」と通称される「セクシュアル・ハラスメント」は、日本では1989年の秋頃から人口に膾炙するようになった言葉である。この言葉がもたらした衝撃は非常に大きいものがあった。この年の秋（9月から11月にかけて）の週刊誌の見出しを追ってみると、そのことがよくわかる。男性が読者の大半を占める『週刊文春』『週刊朝日』『週刊ポスト』などの各誌では、「こんなのもセクハラなの！？」「セクハラといわれないためには」といった内容の特集が組まれた。また、女性週刊誌では、「こんなにひどい男性たちの『性的いやがらせ』！」といったテーマで、お得意の読者投稿を中心とした特集が組まれた。

今では誰もが「セクハラ」という言葉を知っている。とはいうものの、セクシュアル・ハラスメントの概念が日本できちんと定着したかというと、これははなはだあやしいところがある。「社会論'97」では、受講生がどのようにこの言葉を理解しているかを、簡単な○×式の問題で確かめてみることにした。

☆次のような場合、これを「セクシュアル・ハラスメント（性的嫌がらせ)」であるとすることが不可能のものがあるでしょうか。不可能であると思うものの番号（いくつでも）を回答してください。何もなければ、回答欄は空欄でかまいません。

1　仕事の途中に同僚の女性から何回もデートに誘われたので仕事が進まなくなった（男子社員)。
2　職場に女性のヌード写真のピンナップが目に付くように貼られている。
3　課長の意見に猛烈に反対したら、「ブスはこれだから困るなあ」と聞こえよがしに男子課員の誰かが言った。
4　大学のゼミの飲み会の後、「ふたりっきりで飲もうよ」と女性の教員にしつこく誘われた（男子学生)。
5　試験ができなくて追試を受けた科目で、追試の後教員（男性）から「今度旅行に行こう」と誘われた。(女子学生)
6　大学で、ゼミの最中に、いつも性的なジョークを飛ばす人間が一人いて、彼がジョークを飛ばすとみんなが笑って一人しかいない女子学生の自分を見る。
7　就職活動の時、面接で「彼氏はいるの？」と面接官に質問された（女子学生)。
8　仕事をしていると、後ろの席の男子社員が「ねえねえ」と言って、ヌード写真が出ているホームページを見せられた（女子社員)。
9　よくいく喫茶店のマスターが、仕事が暇だとカウンターにいる自分（女性）の隣に座って、肩になれなれしく手をかけたり、背中に触ったりする。
10　酔うとやたらとみんなに「オレと不倫しない？」と言う既婚の課長、「Kさん（女性）を口説き落とした」といううわさが立った後の冬のボーナス、彼女の査定がやたらよかった。

なお、質問文作成には塩谷弘康（福島大学行政社会学部、法社会学）の協力を得た。

結果を次にまとめておく。回答者は計130人。うち、教育学部51名、行政社会学部22名、経済学部49名、不明８名。女性は73名、男性46名、不明11名であった。

性別がはっきりしている回答のみ、性別ごとの正答率を見るために別途集計した。

［回答］

（全体）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
可　能	68	107	104	80	90	104	104	102	108	88
不可能	62	23	26	50	40	26	26	28	22	42
正答率	52.3%	82.3	80.0	61.5	69.2	80.0	80.0	78.5	16.9	67.7

（女性）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
可　能	39	58	59	48	54	59	63	54	64	51
不可能	34	15	14	25	19	14	10	19	9	22
正答率	53.4%	79.5	80.8	65.8	74.0	80.8	86.3	74.0	12.3	69.9

（男性）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
可　能	25	39	39	26	31	38	31	40	37	30
不可能	21	7	7	20	15	8	15	6	9	16
正答率	54.3%	84.8	84.8	56.5	67.4	82.6	67.4	87.0	19.6	65.2

※「不可能」は番号が書き込まれたもの。「可能」は番号が書かれなかったもの。
正答は、１～８、10が「可能」、９が「不可能」。
完全正解は、２人。

一般における「セクハラ」の用法を見ていると、おおよそ「男性が女性にエッチなことをしたり、言ったりすること」というように用いられている。もちろん、男性から女性に対して望まない性的な接触や発言がなされることは、どんな場合でも好ましくないとは言える。

だが、セクシュアル・ハラスメントは、それらを完全に網羅する概念ではない。この言葉はあくまでも、労働の場を中心として考えられている概念である。アメリカの雇用機会均等委員会 (EEOC) による定義を見ておこう(20)。

「相手がいやがっているのに口説いたり、性的な愛情を要求したり、その他、言葉や身体による性的な意味合いを持つ行為を以下のような場合において行う時、それはセクシャル・ハラスメントを構成する。

(1) 明示的あるいは暗黙に、性的要求に従うことが、個人の雇用の条件にされる場合、

(2) 性的要求への諾否が、個人に影響を与える雇用上の意思決定の基礎として使用される場合、

(3) そうした行為が、相手の職務の遂行を妨げるか、あるいは脅迫的敵対的で不快な仕事環境を形成する目的によって行われる場合、あるいはそのような効果を持つと十分判断される場合。」

よく言われるように、ここでは「対価型」と「環境型」の二タイプのセクシュアル・ハラスメントが定義されている。「対価型」とは、「なにかと引き換えに性的要求に応じるように求めるもの」であり、「環境型」とは、「性的な言動によって、職務遂行に支障の出るような職場環境を作るもの」であると言える。

したがって、セクシュアル・ハラスメントは、あくまでも労働問題の一環として定義された概念であるといえる。この概念は、不快な性的行為については、「もし望まないものであれば、その場、あるいは当の人間から離脱することによって回避すればよい」とよく言われるのに対し、「離脱したくても離脱できない状況」があることを明確にしたものである。つまり、職場からの離脱は、経済的・社会的不利益が非常に大きく、ある意味では、当人にとっての死活問

題たりうる。だから、物理的強制がなくても不当な性的行為として十分告発が可能である。そして、そのための概念装置がセクシュアル・ハラスメントなのである。

ところで、「離脱したくても離脱できない状況」は必ずしも職場だけではない。大学という場も、たとえば成績評価やゼミナール・卒業研究の指導などをめぐっては、「離脱したくても離脱できない状況」となりうる。理科系の研究室の人間関係や宿泊をともなう実習、あるいは芸術系での個人指導も、状況によっては含めて考えられる。最近とみに、大学を舞台にした「セクハラ」が明るみに出るケースが増えているが、このように、大学、あるいは学校一般という空間もまた職場とならんでセクシュアル・ハラスメントを構成する場となりうるであろう(21)。本稿では、これを仮に「キャンパスのセクシュアル・ハラスメント(sexual harassment on campus)」と呼んでおくことにする(22)。

先に載せた設問には、この「キャンパスのセクシュアル・ハラスメント」の例も付け加えられている。もともとこの設問は、鳥取大学工学部で1997年３月に学科長会議での承認を受けた「ガイドライン」も参考にして作成している。セクシュアル・ハラスメントの概念をあまりに広く拡大することは混乱を招く元であると思われるが、本稿では職場と大学が中心であると、若干従来の概念を拡大して適用することにしたい。

セクシュアル・ハラスメントは、よく、法律の専門家からも「難しさ」が指摘される。それは、性関係という「個人的なこと」をどこまで法律などで裁いていいのか、ということに関わる「難しさ」もあるだろう。あからさまに「セクハラなんていうのはおかしい」と発言する法曹関係者もいる。これは「公／私」の区分に関わる問題で、それ自体大変に重要な論点であるが、本稿では詳しく触れる余裕がない。ここでは、江原由美子の議論(23)などを参考にしながら、もう少し社会学的な立場から見たときの問題点と「難しさ」について述べておくことにする。

(1)　セクシュアル・ハラスメントは女性差別か？

セクシュアル・ハラスメントの概念は、被害者を女性と限定するものではない。男性が被害者になることもあり得る。また、必ず異性間で生じる問題ということでもない。合衆国などでは、同性間のセクシュアル・ハラスメント訴訟が起こっているとも聞く。

ただし、現状では、セクシュアル・ハラスメントの被害者となっているのは女性がほとんどで、その限りでは女性差別の一環であるといいうる。セクシュアル・ハラスメントの本質が女性差別であるというよりはむしろ、社会一般での性をめぐる規範が男性と女性で異なっている、つまり「性規範のダブル・スタンダード」が問題である、あるいは、女性と男性の権力関係一般が社会の中で不均衡であることからくる問題であると考えた方がいいだろう。

(2)　セクシュアル・ハラスメントはなぜ「難しい」のか？

性暴力一般について言えることは、それらが「立証不可能」なことがしばしばあるということだ。つまり、法廷などで立証するためには客観的な証拠が必要とされるが、性関係の強要は第三者が同席しない状況で行なわれることが多いし、そんな場合に目撃者が伴うことを期待できるはずもない。軽い「セクハラ」（通りすがりに身体に触ったり、性的なジョークを言ったり）というものも、行為そのものは行為が終わったとたんに痕跡を残さず消滅してしまうので、証拠を残しておくこともできない。（キャッシュ・ディスペンサー・コーナーでもないのだから、職場でビデオを常に回しておくわけにもいかない！）

また、被害者になった女性の側からは、告発が「難しい」ということもある。これも「性規範のダブル・スタンダード」に関係して来るものなのだが、性的被害を受けた女性はその性的被害を公にすることによって、負のサンクション（制裁）を受けることが大いにありうるためである。また周囲も、「そんなことをしてもあなたが傷つくだけだから」といって告発を抑制することがしばしばある。

では、簡単に設問の解説と集計結果の検討をしておこう。

1は、「執拗もしくは強制的に、性的行為に誘ったり、交際の働きかけをすること」であり、これはセクシュアル・ハラスメントを構成する可能性がある。この場合、業務遂行の妨げになっているので、セクシュアル・ハラスメントに該当する可能性は高いと言える。

2は、これは性的な展示による不快な職場環境の醸成に該当する。「環境型」セクシュアル・ハラスメントの典型例である。

3は、「異性の主張や意見を異性としての魅力に結びつける（「権利を主張する女性は、性的魅力に乏しい人だから」等）こと」であり、セクシュアル・ハラスメントを構成するとされる。

4は、「キャンパスのセクシュアル・ハラスメント」を構成する可能性がある例である。先程述べたとおり、「教員×学生」という関係は、労働上の関係ではないが、労働と同じく、「その場を離脱すると不利益を被る」という特徴を持つ。その不利益は直接の経済的なものではないかもしれないが、学歴資格の取得などにかかわり、将来の経済的不利益に結びつくことは十分想定しうる。この例では単位や学業上の指導における権限を持つゼミナールの指導教官が、学生に対して、「ふたりっきりのお酒」（異性間の「デート」と考えられる）を執拗に要求することが、指導等における想定される不利益と引き換えの行為と解釈しうる。

5も、「キャンパス・セクハラ」の例である。追試まで受けているということは、成績が悪かったということだろうが、その場合に、とりたてて教員の側から「旅行」（おそらく二人で）の誘いをかけるということは、単位と引き換えの性的な要求をしていると解釈しうる。この場合、明示的に対価が要求されていなくても、可能性が客観的に示されればセクシュアル・ハラスメントになるということが、労働については法的な了解事項となっている。「キャンパス・セクハラ」の場合の法的解釈はまだ確定していないかも知れないが。

6は、「キャンパス・セクハラ」のその3。これは「環境型」の例である。性的な言動によって不快な念を抱かせる環境を醸成するという意味では、まさ

に典型例とも言いうる。

７は、いわゆる、就職活動における「セクハラ面接」「セクハラ質問」のたぐい。

８は、「最近こういうの多いかも」と思って入れた例である。他意はない。

９だけはセクシュアル・ハラスメントに該当しない。「いきつけの喫茶店」は、職場や学校と違い、その場を離れても経済上・職業上・学業上等の不利益を被ることがないからである。ただもちろん、このマスターの行為は度を超せば犯罪にもなりかねないし、決して許されるものでもない。

10の設問文は、なぜ「Ｋさん」かというと、もともと11番目の設問だったので11番目のアルファベットを使ったということなのだが、一つ減らしたのでずれてしまった。これも他意はない。この設問は塩谷の指摘によって追加したものである。つまり、通常、対価を提示されての性関係を求められた当人が、それをセクシュアル・ハラスメントであると告発することはできるわけだが、何人かに対価を提示していた場合、要求に応じなかった者（利益も不利益も得ていない）からセクシュアル・ハラスメントを言い立てることができるかどうか？ということに関わる問題である。この種の状況でもセクシュアル・ハラスメントを構成するという説があるらしいので、ここではとりあえずその説にしたがって、「セクシュアル・ハラスメントに該当する」を正答としている。

前掲の回答集計結果を見てみよう。

１、４（共に女性が加害者のケース）は男女共に正答率が低い。やはり、「女性は被害者」ということが暗黙の了解になっていると考えられる。もちろんそれは、「性規範のダブル・スタンダード」を下敷きにした了解である。

９も正答率が低い。おそらく飛び抜けて低い数字であるのは、「不可能なものを回答させる」という問いの形式によるものが大きいのだろう。あと、10も若干低い。これはやはり、境界例的な設問であるからだろう。

男性と女性の正答率の差が一番目立つのは設問７である。これは男性の方が20%ほども低くなっている。「セクハラ面接」については就職活動の時期に毎

年報道も多いのだが、将来の当事者として敏感な女子学生に対して、男子学生はあまり意識して受け取っていないということなのかも知れない。セクシュアル・ハラスメントをめぐる男女学生の意識の格差をもっとも顕著に示したものであった。ちなみに、女性の正答率は7が一番高い。

8や2で女性の方が正答率が若干低いのは、「この程度ではセクハラとは言えない」とあきらめているためなのだろうか。もっとも、あまり深読みはしないでおくことにしたい。

3　感想と「メディア・ミックス」とレポートと

以上、ここまでは「わたしはこんな講義をしました」ということを長々と述べてきた。なんだか自慢？話のようにもなってしまったかもしれない。だけど、実はわたしたち大学の教員は、ほかの教員がどんな講義をしているのかあまり知らなかったりする。また、自分自身が講義を受けたのははるか昔のことになってしまっている。だから、「いい講義」についての記憶も薄れがちだ。

実は、「いい講義」についてもっとも目が肥えているのは、実際に現在いろんな教員の講義を受けている現役の学生なのだ。だから、「いい講義」をしようと思ったら、まず大切なのは学生の声を聞いてみることだろう。

最初に述べたように、「社会論 '97」では、ほぼ毎回講義の終わりにその回の講義の「感想」を書いてもらうという試みを行なってみた。感想だけでなく、質問や意見なども歓迎する、と最初に述べてあり、実際、講義の中ではしにくい質問や内容などに対する意見も受け取ることができた。大教室で100人から200人の学生を相手に行なう講義では、どうしても話が一方通行になってしまうが、ささやかなフィードバックの回路のつもりでもあった。

少し実際の例を見ていくことにしよう。できるだけ本文中で紹介した回の「感想」から抜粋していくことにしたい。

次のものなどは、講義中には出ない「意見」として貴重なものであった。

（※印の箇所は、講義で配布したプリントにおける高橋のコメント。以下同じ。）

(a)　先生が黒板に、女→男のところで、「家事育児への協力」と書いたのが気になった。「協力」とは結局女性が主体としてやり、男性はその手伝いにとどまるという気がするので、あまりよくない表現だと思った。（学部不明、女性）

※すいません。反省してます。でも、「ゴミを出す人」なんて明らかに手伝いじゃない？　女性の側も現在の役割分業構造を考えの基盤においているのでこういう表現になるんだろうけど。

話す方が知らなかった貴重な情報をくれる人もいる。

(b)　「美人」という言葉は、ヤオイ小説（男性同士の同性愛を扱ったものを指す）では女役（相手より小柄で、髪も長めで、顔立ちが整っているような人）の男性に対する形容詞として、ごく自然に使用されているようです。ここでもやはり「女性」もしくは「女性的」な人に対して「美人」という言葉が使われることが証明されてるように思える。（行政社会学部、女性）

(c)　小、中学校の時（高校は男子校だったので比較できない）、何かの式典で座る時の座り方を、先生が、男はこう、女はこう、と教えて（強制して？）いたのを思い出した。たぶんみんな私と同じように教えられたのだろう。すでに無意識にそうなってしまっているようだ。教育ってこわいと思った。（経済学部、男性）

(c)は、「女と男の座り方講座」の回の「感想」である。

座り方の指導の話は、非常勤で勤務している看護学校の学生からも聞いて確認した。彼女／彼らによれば、ほぼ６割が、小・中学校の間に、男子と女子とに分けて「正しい座り方」の指導を受けた経験があるということらしい。

講義に関する素直な感想を述べてくれる学生もある。肯定的な感想はそれなりに嬉しくはげみになるし、否定的な感想は、それなりに心に突き刺さるが、大事にしなければいけないと感じさせられる。

試しに、同じ講義について正反対の感想が寄せられた例を紹介しよう。これらは、たまたま連続していた。同じ学部の友人同士で並んで受講していたのだろうか。((d)〜(g))

(d)　今日の講義はなんか暗い気持ちになった。美の多様化とか拡散とかって言っても、やっぱり美人は美人だと思う。不美人はつらいです。（行政社会学部、女性）

(e)　すごく楽しかった。論理的に美人をつきつめてくと、こんなかんじなのか。う〜む。

しかし私はミスコンには反対。女を性の対象としてしかみてない。ビールのCMになぜ水着の女性？　さわやかさ追求なら男性でもいいじゃん。（行政社会学部、女性）

(f)　今日の授業は「美しさ」という言葉の恐迫概念[ママ]にさらされているようでつらかった。（行政社会学部、女性）

(g)　今日もおもしろかったです。「自分はおどらされていない。」とか「私は私よ。」って自信を持って言えるかどうか心配になってきます。悲しいけど、本当の自分てどこにあるのかな？　どこにおいてきたのかな？（行政社会学部、女性？）

※ちょっと岡村孝子の「ピエロ」とか「今日も眠れない」（古いか〜）なんて歌を思い出したりしました。

講義中に実施する調査は、先に述べたような目的で行われるのだが、こちらの意図を裏切って受け止められることもあるのがよくわかる感想が返ってきたりもする。((h))

(h)　私は“結婚したい”人間なので、今回の講義は非常に興味深いものでした。私たち“したい”組の人間は応々として女性に気に入られたいと思う人間なのでしょうけど、アンケートの結果に置いて女性が考える理想が非常にカクイツ的であったのは、相手にとって理想の自分を作りやすいのでウレシイですね。(行政社会学部、男性)

あまり調査結果を「恋愛マニュアル」や「理想のカレ／カノジョを射止めるための10箇条」という形で利用していただきたくはないものである。もっとも、次のような形でならいいのかもしれないと思うこともあるのだが。

(i)　女性が男性に家事をもとめているということは全然しらなかった。今から、ちょっとずつ家事・料理を訓練していこう。(経済学部、男性)

こういう種類の「批判」もあるところが、楽しいところでもある。((j)〜(k))

(j)　講義の内容は、意外とおもしろい。でも、先生という人とは結婚したくないと思った。なぜかというと、理屈っぽくなり過ぎてるように思えるからだ。(行政社会学部、女性)
(k)　先生は結婚してるんですか。結婚してるとしたら、奥さんにどんなことを望みましたか。以前にファッションに気をつかっているといってたけど、ちょっとイケてないです。モテないヤツの典型だと思います。(行政社会学部、男性)

ちなみに、わたしは「ファッションに気をつかっている」と言った覚えはない。「気をつかった方がいいよ」と言われたという話をしただけである。

講義のメインの内容よりも周辺が気を引いてしまうというのは、昔も今も変わらないものであるらしい。わたしにもそのような経験がある。((l)〜(m))

(l)　今日の講義で一番印象に残っていたのは、先生の「歌」でした。上手でしたよ。（拍手）（行政社会学部、女性）

(m)　前回の先生の「ちょっち」という言葉に一人で爆笑した。（教育学部、男性）

(l)は、「『学生時代』を知っていますか？」の回で、「学生時代」が古い歌であまり知られていないようなので、アカペラで高橋が歌ったことを受けての感想。(m)は、人気アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』(GAINAX、テレビ東京系放映）の登場人物である葛城ミサトの口真似が、ついわたしの口をついて出たことに対するリアクションである。

さて、講義設計のところで述べたように、「社会論·'97」ではコンピュータ通信ネットワーク・ニフティサーブとの「メディア・ミックス」を試みた。調査結果、講義の概要や学生の感想などを前述の会議室に逐一転載して、会議室上やチャット（ニフティサーブでは「リアルタイム会議」と呼ばれる）で得た意見などを、発言者の許可を取った上で講義で配布するプリントに記載し、講義の感想からさらにそれらの意見などにコメントがついた場合には、再び会議室上で返す、という具合に。

たとえば、(i)の意見には次の(n)のようなコメントがついた。

(n)　男子で、女子の家事参加要求に驚いている人がけっこういますね。福島って、別学（男子高／女子高）が優勢なところでしたっけ？（何も知らなかった男子高出身者の yeswhome)

※1995年の割合では、別学は全国５位（共学率83.0%）。ちなみに、１位は宮城県です。

ニフティサーブとのやりとりだけでなく、受講生同士のやりとりも交わされたこともある。（やや長くなるので省略する。）ゼミのように少人数でならいろ

いろ意見をお互いに交わすこともできるが、今回のような大人数の講義ではなかなか難しい。バズ・セッションの機会を設けるにしても、なかなか取り仕切るのも大変ということで、それはあきらめたことに対する補完の意味もあったので、限定付きではあるが成功した試みであったと評価できるかもしれない。

感想を書いてもらったことには、次のような評価もあった。

(o)　おもしろい授業でした。感想とか、男の人の意見も女の人の意見も、参考になりました。(行政社会学部、女性)

(p)　１度だけ感想がのってうれしかった。(教育学部、女性)

ただ、ニフティサーブとのやりとりは、もう少し活発になってもよかったと言える。ニフティサーブからの意見に対して、感想をもう少し積極的に書く、書いてもいいのだということを受講者にしっかり認識してもらえなかったのは、こちらの失敗である。

自画自賛になるところもあるが、講義全体についての学生の評価も紹介する。最終回の講義で書いてもらったものである。だいたい「感想」には、あまり悪いこと・批判めいたことは書かれていない。それが学生から教員への「礼儀」であるのかもしれない。((q)〜(t))

(q)　先生の授業毎週楽しみにしていました。おわってしまうのは非常に残念です。先生みたいに物事を考えられる男がふえるといいなと思います。(教育学部、女性)

(r)　共通教育の中で一番大学の授業らしかったと思う。私は応用社会学科なので、この授業を受けてより社会学に興味を持つことができた。来年に生かしたいと思う。(行政社会学部、男性)

(s)　普段、無意識のうちに疑問を抱いていたことについて、他の人のいろんな意見とか聞けて楽しかった。大学の授業が、社会論みたいに皆で、自分で、

いろいろ考えられるものになればいいのに‥‥。（教育学部、女性）

(t)　唯一さぼったことのない講義でした。（教育学部、女性）

ということは、けっこうほかではさぼっているということになるわけだ。「社会論 '97」は、受講登録者309人で、出席者は、初めの頃が250～200人、中期で180～150人程度、いちばん少ないときで100人程度。決してさぼる人が少ない講義ではないが、健闘した方かもしれない。プロ野球ではないが、「３割いけば大したもの」とわたしの出身大学では教員の間で言われていたようだ。この基準に照らせば、「社会論 '97」の最終回は４割ぐらいの出席だったので、「イチローなみ」の成績だったと判断していいだろうか。

ところで、「感想」の中に、

(u)　レポートで、おもしろいというか、知っておくとためになるようなものを私たちにも一部でもいいので公開していただけませんか？　でなかったら、みんながどういう主題でレポートをかいたとかも知りたいです。（教育学部、女性）

というものがあった。内容にまでは触れることはできないが、レポートおよび評価についても簡単に言及しておくことにしたい。

レポート提出者は197名（約64％）、そのうち、

評定Ａランク（「優」に該当）　……10名
評定Ｂランク（「良」に該当）　……67〃
評定Ｃランク（「可」に該当）　……72〃
評定Ｄランク（「不可」に該当）……48〃

であった。

概して、自分で調査を行った者は、問題関心も高く、水準の高いレポートを

書いてきている。評定Dの者は、(1)事例もしくは事例の集合としての事象の分析を行っていない（一冊本を読んでまとめただけ、など）、(2)レポートのテーマが講義のテーマから選べていない、(3)水準が低い（量・質）、のいずれかに該当する。

ただし、レポートの評定がDであっても、２回任意に提出してもらった小レポートの成績を加味するので、即成績が「不可」というわけではない。

先に述べたとおり、このレポートは受講者に「Do Sociology!」してもらうためのものである。楽しかったにせよつまらなかったにせよ、受動的に講義を受けただけの学生には書きにくかったレポートだろう。提出者が６割５分程度ということには、こうした事情もあると思われる。

内容については、「まあ、こんなものか」という印象を受けた。毎年専門の講義ではレポートを課すが、それと比べると経験不足のためだろうが、全体的にやや見劣りがするものが多い(24)。また、講義の最終回でわざわざ時間をとって「たとえばレポートはこんなふうに書く」ということを話したのだが、それにもかかわらず（というか、単に講義に出席していないということなのだが）、仮説が明らかでないもの、どんなアンケート・調査を行なったのか、データの全体像はどうだったのかがまったくわからないレポートなどもあった。特に、データ像が不明なものについては、呼び出して再提出を求めたものもある。

ただし、出来がそれほどは良くないレポートにも、明らかに楽しんでレポートを書いているとわかるものもあった。感想の(s)に、「自分で考え」られる講義を求める声を紹介したが、いくら学生がさぼるのが好きと言っても、決していつでも・どこでも・だれでもさぼるわけではない。当然ながら、「さぼられる」方の責任もある。そう、みんな、好きなこと、楽しいことだったら、いくらでも「自分で考え」るのだ（時間があれば）。「Do Sociology!」の実践、つまり、社会学的に「自分で考え」ることが、ある面楽しいものでもあることが少しでも多くの学生にわかってもらえたなら、この講義は成功だったと思う。

社会学についての大まかなイメージ（もっとも、片寄ったイメージではあるかも知れないが）や期待感ももってもらえただろう。共通教育、旧教育体系の言い方をすれば教養科目（専門科目の前におかれるべき科目）としての役割は、それなりに果たしたと言いうるであろう。

もっとも、講義そのものについての「成績評価」はここではしない。受講した学生のみなさん一人一人に訊いていただきたいと思う。

おわりに

他人の評価がすごく気になるわたしは、感想をいちいち書いてもらわない専門科目の講義（生活文化論）でも、「どうだった？」とよく顔見知りの学生に講義の後に尋ねてみる。「おもしろかったですよ」とたいていは答えてくれる。顔見知りということもあるかも知れない。あるいは、単なる外交辞令であることもあるだろう。あるいは、こういうこともある。自分自身、「いい講義」ができなかったな、と思うときは、わたしは講義が終わった後にすごく落ち込んでしまう。そんなときは、学生にわざわざ尋ねてみる気にもならない。だから、学生に尋ねてみたときというのは、比較的「よかったかな」と自分でも思うときだということもあるかも知れない。

振り返ってみると、「社会論 '97」は、全体を平均して「よかったかな」と思ったことが多かった講義だった。また、講義の準備をし、話すことを通じて自分でも得ることが多かった講義でもあった。学生の「感想」でいいことを書いてもらった（実際に学生が「よかった」と思ったかは別の問題）ことも、こう感じた一つの原因になっているかもしれない。「いい講義」をしたいと思い、実際にそこそこの結果を出せたということだろう。

……ということで、今後自分自身が「いい講義」をするためにも、経験を一度客観化しておくためにこの原稿は書かれた。ある意味で自己満足のための文章なのだが、しかしその文章が「いい講義」をしたいと思う教員や「いい講

義」を聴きたいと思う学生にとっての何かの参考に万が一なるかもしれない（そんなにたびたびはないだろうが)。あるいは、今後一人か二人でもいるかもしれない、あの年のあの講義の内容について知りたいと思ってくれる学生の好奇心を満たすものであるかもしれない。どうせ紀要論文なんて、読者は二、三人しかいないと鷲田小彌太の『大学教授になる方法』（青弓社）で皮肉られている程度のものだ。だったら、その二人か三人のためにでも、こうして活字にしておくことにも逆に意味があるかもしれない、と自己の行為を正当化しつつ、稿を閉じることにしよう。

※講義を行ない本稿を執筆するにあたって、さまざまな方のご意見などを参考にさせていただいた。講義の元になった原稿の執筆機会を与えて下さった矢澤修次郎教授（一橋大学)、学生の「感想」についてのヒントをいただいた漆田和代さん（女のスペース「じょあん」主宰)、NIFTY SERVE の会議室などでいろいろとコメントを下さった yeswhome さん・REI さん・あやりんさん・ぎんねずさん・そのこさんなどの「NIFTY SERVE　生涯学習フォーラム」の方々、講義の資料についての感想をいろいろとうかがった浅野かおるさん・辻みどりさん（ともに福島大学行政社会学部助教授）・南條かおるさん（福島大学地域政策科学研究科)、以上の方々はお名前を上げさせていただくことで感謝の言葉に代えたいと思う。また、特に名前はあげないが、調査結果および「感想」の入力に関して、数回にわたって教育学部・行政社会学部学生有志のお手をわずらわせたことを、あわせて特記しておきたい。

〔註〕

(1) この科目、以前は「社会学」という名称であったようだ。「社会学」と「社会論」とどう違うのかは、名称変更後に福島大学に赴任したわたしには全く不明だが、担当者の専門次第で狭い意味での社会学よりは幅の広い内容にできるということがあるのだろうか。

(2) もっとも、元来がおとなしい性格なので、あまり羽目を外すことはできなかった。実際の執筆内容については、矢澤・玉水編、『社会学入門』（仮）、八千代出版、近刊、の第３章「ジェンダー・身体・セクシュアリティ」をごらんいただきたい。なお、本書は本稿脱稿時にもまだ出版されていないため、テキストとしては用いられていない。

(3) 「個人的なことは政治的である」という、1970年代のアメリカ合衆国の女性解放運動の中で使われたスローガン。

(4) 香山リカ、『あなたのココロはダイジョーブ!!』、早川書房、1997年、287頁。

(5) http://myriel. ads. fukushima-u. ac. jp/～june/lecture/lec97b. html を参照のこと。

(6) 橋本和孝、「レジャーランド時代の社会学断章　――社会学講義ノートのスケッチから――」、『行政社会論集』、第５巻第１号、に所収。

(7) 本筋とは全く関係ないどうでもいいことなのだが、「音楽社会学」のところで、ＴＶドラマとのタイアップによるヒット曲の例として辛島美登里さんの「サイレント・イヴ」がとりあげられているのは、辛島さんのファンであるわたしとしては非常に嬉しかった。

(8) 水玉螢之丞・杉元伶一、『ナウなヤング』、岩波ジュニア新書、1989年。

(9) 講義では、ここであわせて、日本における「近代家族」のバリエーションとしての「教育家族」の成立、およびその中での「子ども中心主義」や学歴資格取得志向の出現といった歴史的経緯についても、若干詳しく触れている。その内容については、髙橋準、「新中間層の再生産戦略」、『社会学評論』、43－４、1993年、を参照。

(10) これがなぜかということも非常に大きな問題なのだが、ここでは触れない。

(11) 井上章一、『美人論』、リブロポート、1990年、および、小玉美意子編、『美女のイメージ』、世界思想社、1996年。

(12) 質問紙の最後で４種類の女性向けファッション雑誌の購読に関する質問がある。この質問は、1996年５月に発行された女性向けファッション雑誌の広告の誌面量を調査したところ、エステティックと「ダイエット」関連の広告ページがこれら４誌でもっとも多かったことから、学生がこれらの雑誌についてどのようなイメージを持っているのかを確認する目的で置かれている（自由記述式であるので、紙幅の関係から結果は省略する）。なお、別の調査によれば、受講した女子学生はこの４誌をあまり購読していない。彼女たちにもっとも読まれているファッション誌は『non-no』であった（約半数の女子学生が読んでいるという結果が得られた）。ちなみに、『non-no』にも「ダイエット」や「エステ」関連の広告は数多く掲載されていることが、先述の誌面調査の結果として明らかになっている。

(13) 浅野千恵、『女はなぜやせようとするのか』、勁草書房、1996年。

(14) 香山リカ、『リカちゃんコンプレックス』、ハヤカワ文庫、1994年、45－46頁。（引用した文章の初出は1990年。）

(15) ここでは、中内敏夫に従って、学校教育に従属するようなタイプの「家族の行う教育」を「家庭教育」と呼び、学校教育とは独立した「家族の行う教育」のあり方を「家族教育」と呼んでいる。

(16) 沢山美果子、「『結婚の条件』の近代」、前掲、小玉編、に所収。

(17) 落合恵美子、「ビジュアル・イメージとしての女」、女性史総合研究会編、『日本女性生活史　第５巻・現代』、東京大学出版会、1990年、に所収。

(18) 「身体のパーツ化」は現代社会における権力の一形態でもある。ここでの権力とは、ミシェル・フーコーの権力概念のことを指す。内田隆三、『消費社会と権力』、岩波書店、1987年、を参照。なお、髙橋準、「フェミニズムとフーコー」、富山・舘・小林編、『フェミニズムの知』、世織書房、近刊、に所収、もこの論点に言及している。

(19) もう一つ付け加えるなら、今日、「美しくなるための努力」は、現代社会に特有の「シャドウ・ワーク」となっているとも言えるだろう。この努力は決して公的に評価されることはないが、しかし、女性が生活していく上で必須の「労働」である。

(20) 江原由美子、「セクシュアル・ハラスメント分析講座入門」、『ラディカル・フ

ェミニズム再興』、勁草書房、1991年、に所収、より重引。

(21) 高校までの学校については、特に、小・中学校に関しては、義務教育ということもあり、また、ほとんどの場合、児童・生徒は未成年であるということもあり、比較的先ほど本文中で述べた「不快であれば離脱すればよい」というレトリックはなかなか用いられない（「子ども」への性犯罪という文脈でとらえることが可能）。しかし、大学の場合は、学生の側も「おとな」であり、実際に成年であったりするので、その限りにおいては「当人の判断能力」が十分にあるものと解されがちである。「自由意志」があると考えられるがゆえに「望まない」ものであっても自発的に同意したとされてしまうというものを告発可能にするのが「セクシュアル・ハラスメント」という概念装置であるとするならば、学校一般ではなく大学という空間で特にセクシュアル・ハラスメントという言葉を使っていくことは十分意味のあることであろう。

(22) 大学（あるいは学校）には職員・教員・学生の三者が存在するため、被害者と加害者の組み合わせは６通りが考えられるが、ここでは「キャンパスのセクシュアル・ハラスメント」を教員が加害者で学生が被害者（「教員×学生」と略記）に限定して考えている。

この場合重要なのは、「労働権の侵害」である通常のセクシュアル・ハラスメントとは異なる議論が必要となるということだ。おそらくその一つとして、「教育を受ける権利」を考えることができるだろう。つまり、「性的暴力によって教育を受ける権利を侵害されない」「性的なからかいや性的に不快感を覚える環境のために教育を受けることから排除されない」という立論である。ただし、実際に法的な効力があるかどうかは別である。

さらに、「キャンパスのセクシュアル・ハラスメント」には次のような固有の問題点がある。(1) 教員－学生間にはもともと「教える／教えられる」という権力関係が存在する。学生は対価を払ってサービスを受ける側であるにもかかわらず、大学においては「お客様は神様です」はなりたたない。そのため、セクシュアル・ハラスメントにおける対価が具体的に示されなくても、学生の側が対価を想定してしまう場合が多い。（研究室、講座、ゼミなどにおける人間関係のあつれきや研究指導上の不利益など。）(2)研究室、講座単位での拘束の強さによる圧迫。特に、理科系や芸術系で強い。

また、セクシュアル・ハラスメントは、痴漢とは違って、ある程度の「親しい」関係を前提に発生するものである。大教室での講義ではセクシュアル・ハラスメントはほとんど可能性としてはありえないが、数名で行なわれるゼミナールなどのような関係では、可能性は増大する。また、マンモス私大よりも国立大学の方が、教官一人あたりの学生数が少ないために、セクシュアル・ハラスメントを助長する可能性が高くなることも考えられる。福島大学は「教員と学生との距離が近い」大学として評価されていることがあると聞くが、今言ったような意味では、それはセクシュアル・ハラスメントが生じ易いということをも同時に意味している。

(23) 江原、前掲論文、および、江原、「『セクシュアル・ハラスメントの社会問題化』はなにをしていることになるのか？」、井上・上野・江原編、『セクシュアリティ』（日本のフェミニズム６）、岩波書店、1995年、に所収。

(24) もちろん、個々のレポートをとれば話は別である。４年生のものなどは、さすがに年季が入っているためか、結論の質はともかく素材はたいへん盛りだくさんでしかもよくまとまっているものがいくつもあった。あるいは、女性のセクシュアリティ（オーガズム経験）についての調査レポートや、介護労働におけるジェンダーの問題に関する考察のレポートなどは、意気込みもまとめ方も充実しており、大学１・２年生でここまでやってくれるならあとの指導が楽だと、教員としては不謹慎なことを思わず考えてしまうようなレポートであった。